
睡眠不足とバースデーケーキ

姫凜栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡眠不足とバースデーケーキ

【Zコード】

Z6870E

【作者名】

姫凜栖

【あらすじ】

いつも変なことばかりやってくれる彼女が、今日は鼻歌交じりににこにこと笑いながら、何かをやつてた。

「」

「ひめりあ、今日の彼女は機嫌が良いらしい。

彼女は、どこかで聞いたことのある今は見なくなつた歌手の古い曲を口ずさみながら、お気に入りであるらしい古びたティベアを抱いて、長い金糸のような髪を揺らしてパタパタと廊下を走る。

「何か良いことでもあつたのかい?」

そう尋ねると、彼女はまるで子供のように笑いながら「別に」と応えた。

その顔は何か隠し事をしてそれを自慢することを覚えた純粋なくせに質の悪い子供のような微笑みのそれ。

まあ、どうせまたろくでもないことでも思い付いたんだろう。

「」の前みたいに警察沙汰だけは勘弁だ、と切に思つ。だが、

「まあ、退屈はしないわね

「そうかい……」

たぶん、それは今日も変わらず、また平穀とは違つ向かなのだろう。

それこそ、彼女の言つ退屈しない程度には。どうでもいいけど。

「あー……そんなに嫌そうな顔しないでよ。少なくともひーくんにとつては悪いことじやないわよ?」

今まで何度も似たような台詞に痛い目を見た経験から、その言葉は限り無く嘘つぽい。というか、信じたら負けだと思つ。

「それなら楽しみにしとくよ」

とりあえず、今は疲れた。彼女が今度は何を企んでいるか知らな
いが、休んでから考えよう。

「それじゃ、僕は寝るね。それから、何をやるかは知らないけれど

あまり派手にならない程度にしてよね」

「え？ 何？ まだ寝るの？ もうお昼近くよ？」

「『まだ』じゃないよ。『今から』寝るの」

彼女は何か言いたそうな顔をしていたが、一仕事終えた後の睡魔に抗う術は僕にはなく、

「おやすみ」

言つが早いが、睡眠不足を解消するために自室のベッドへと向かつた。

暗い自室には木造の無駄に大きなベッドが置かれて、それがこの部屋のスペースの大部分を占めている。それ以外に、特にものがない。

自分で言つのもためらつてしまひへりこ、異常に生活感の無い部屋。

それでも、どこか落ち着くその部屋の雰囲気に満足しながらベッドにダイブ。

柔らかいベッドに染み付いた洗剤の香りに包まれながら息を吐く。横になつた身体から固い力が抜けて、抜けた力の代わりに氣怠い眠気が全身を浸蝕し始める。

「今日は良く眠れそうだ……」

誰に言つまでもなく、ただ漏れた独り言に誘われるよつて瞼が閉じられる。そのまま、だんだんと、心地よい夢の世界にはいきないようだ……。

「ひーくん！ ひーくん！ ひーくん！ 起きて！ 起きて起きて起きて起きて起きて起きて！？ 何かオーブンが大変なことになつたから今すぐ来て！？ 早く！ 寝てないで早く！」

今度は何をやつてくれたんだろう、なんて思いながら眠りかけてた体を起こす。

「 Hurry up！」

心地よい睡眠への旅立ちを邪魔した彼女は、そう叫んだ。

その声は、何だか本当に困惑しているように聞こえた。

扉を開けると、そこには大きく丸い碧い瞳に涙の雫をつぶつた彼女がいた。

「どうしたの？」

そう尋ねると、彼女はしゃくり上げるような声で、
「オープンが破裂したの……」

「……はい？」

何とも……想定外といつも、右斜め上辺りから130km/hくらいのスライダーを投げられたみたいな……何と言おうか、まさかこんなコミカルな返答が返ってくるとは思わなかつた。

「あのつ、その、オープン使つて……変な匂いがしてきて、変だなつて思つて覗こつとしたら……」

ボンツと何かが爆発しているように見えるジェスチャーをする彼女に手を引かれながらキッチンへと向かつた。

「……おいおい」

「『ごめんなさい』……」キッチンに入つて、その惨状を見てから軽く頭痛がした。

なにせ、この間買い換えたばかりのオープンは無惨にも煙を立てているし、キッチンは何らかの残骸が飛び散り何かもうこれでもかというくらいに汚している。

「何をどうしたらこうなるんだか……」

「……ごめんなさい……」

申し訳なさそうに身を縮めて俯く彼女を見て、何だか怒る気も失せてしまつた。まあ、今回ばかりは反省しているみたいだから良しとしよう。

「ところで、今回は何をやるうとしたの……？」

それだけは気になつて、彼女に訊いてみた。

彼女は、何だか言つのが恥ずかしいといったバツの悪そうな顔をした。だが、やがて素直に話すつもりになつたのか、とても小さな声で少しづつことの経緯を語り始めた。

けつぎょく、わかつたのは普段は手伝いもしない料理を一人でこ

なしてみせて驚かせるつもりだつたらしいといひ「」。

「それで、その……ケーキを焼こうと思つて……」

「何かレシピに無いような変わつたものでも混ぜた?」

「うん……、と特には何も……。あ。でも、小麦粉がなくて代わりにベーキングパウダーを入れたけど、まさか……」

「それだね……」

とりあえず、今度の暇になつた日にも料理の基本と小麦粉とベーキングパウダーの違いくらいは教えようと思つ……。

「しつかし、まあ……ケーキね……食べたかったのなら言つてくれれば焼いたのに、寝起きで良ければだつたけどね」

何か食べたかったついでに普段できないことをやつて誰かを驚かせてみよ、つてのもたしかに悪くはないかも知れないけれども、普段からできないことがいきなりできるわけがない。ましてや小麦粉をベーキングパウダーで代用するような人には到底無理だらう。

「それで、火傷とかはしなかつた?」

その問いに答えは返つてこなかつた。馬鹿にされたとでも思ったのだろうか。

彼女は顔を真つ赤にして何かくやしそうに唸つた後、体ごと反転させて盛大にそっぽを向いてしまつた。

その様子からは、さつきまでの食あたりを起じて苦しんでいる小動物のような弱々しい瞳はもう見られない。

「……別に、私が食べたかったわけじゃないわよ」

この時ばかりは、何だかふてくされたように弦く彼女が無意味に可愛らしく見えた。

「そう」

軽く彼女の頭を撫でてやると、彼女はその手をうつとおしゃづこ睨んでいただけ。頭を撫でる手を振り払おうとはしなかつた。

「別に……私が食べたかったわけじゃないんだから……」

ふてくされた子供よりもしつこい。そんなにケーキを食べたかつたのか、作りたかつたのか。

とにかく目的は何だか知らないが、料理に興味を持ったのは良い傾向だと思う。たぶん。

「さて、と。ケーキが食べたいか食べたくないかはもういいや。とりあえずこのベーキングパウダー塗れの壁やら床やらを掃除するから手伝つてね。ケーキはそれから

「だ、だから食べたくさんか

「返事は……？」

「はい……」

顔を真っ赤にして俯く彼女の、呻いただけのような声を合図に。一応、料理の後片付けを始める。

それから、汚れた床を徹底的に磨きあげ、ベーキングパウダーの一酸化炭素で破裂オーブンも別段壊れた様子もなく一安心した。

何か、もう眠気程度、どうでも良くなつたね。まだ眠いけどさ。

「さて、と。買い物でも行こうかな」

体を伸ばすと、体中の関節が気持ちの良い音を立てる。

もう昼を過ぎた頃にまた眠気が体を襲うが、また彼女を放置するわけにはいかないだろう。特に空腹状態の。

ついでに眠気を覚ますことも兼ねて、昼食と夕食とケーキの材料でも買いに行こうかと思つたが、

「あ。買い物なら私が代わりに行つてくるわ」なんて言い出した。

……「うん？」

「……聞き間違いだよね？ 出不精で暑いのが大つ嫌いな君が買い物に……？」

失礼ね、と頬を膨らます彼女を見て自分の耳と目を疑つた。

あれだろうか……真夏の日差しの暑さで脳がやられたか、寝過ぎで停止しかけていた脳がやられたか、オーブン爆破の衝撃で脳がやられたか、ケーキを作ろうと頭を使い過ぎて脳がやられたか。とにかく

かく何らかの理由で脳がやられたのは間違いないのだ。」

「病院に連れて行ってあげるから保険証を持って来なさい。できるだけすぐに」

「……何でよ?」

それはきっと君の頭が何らかの理由で壊れたらしいからだ、と眞顔で言つたら頬に彼女の小さな拳の強襲を受けた。

「冗談のつもりだったのに。半分は本気だつたけど。

「とにかく! 昨日から寝てなかつたくせに後片付けとか手伝つてくれたうえに買い物までやつてもらつて……それで倒れられたりでもしたら明日の寝覚めが悪いのよ! 私の!」

あの惨状の後片付けはほとんど一人でやつたんだけどね、と言えばまた殴られるだろう。

まあ、それでも倒れるまではいかないにしてもたしかに疲れている。正直、物凄く眠いし。でも、彼女に買い物なんて任せて大丈夫だろうか。これでも日本に来てから二年は経つてはいるがまだ一人で出かけるには早い気がする。

「……何よ? 何か文句でもあるの?」

「……何よ? 何か文句でもあるの?」

ある。大いにあり過ぎてその辺のカラスにでも食べさせてあげたいくらいに。

「アリス。君、漢字もまともに読めないくせに買い物なんかできるのかい? 日本のお店は向こうと違つて表記は英語で書かれてなんかないんだよ?」

「ひーくん、ひーくん? もしかして私つて子供扱いされてる?」

それとも馬鹿にされてるのかしら? それくらいは知つてゐるわよ!

ちゃんと片仮名と平仮名と小学生レベルの漢字は読めるようになつたんだからね!」

そんなよけいに不安になることを自慢しながら無い胸を張られても……。

どうやら、まったくもつて不安が満載。不本意極まりなこと

に彼女は買い物に行く気らしい。

「別に夕方くらいに行けばいいし……」

「私にお昼はお腹を空かしたまま過ごせ、と？」

……ああ、わずかな良心と罪悪感と大きな空腹が気まぐれを起したのか。

「それなら買い物なんか行かなくとも、カツブラーーメンとか買い置きの冷凍食品とかあるからそれで我慢してって、この間飲み会した時と後に食い尽くしたんだつけ……」

はて、どうしたものか。

「ふあ

「…………

……うん、あぐびが漏れる。

さつきまで中途半端な掃除などをしてたせいか、あまり意識していなかつた眠気が込み上げてくる。……いかん。また彼女を放置したら今度は何を爆破させられるかわかつたもんじゃない。うん。でも、やっぱり眠い。

夕方に買い物に行くのも、その時間帯は混むし。

「じゃあ。……頼もうかな、買い物」

「任せなさい！」

不安ではあるが、大丈夫だろ？。仮にも彼女は今年で26歳だし。ちゃんとケータイを持たせていけば何とかなるだろ？。

とりあえず、その辺にあるペンとメモ帳に買つてきて欲しい材料をメモして持たせて……。

「何これ？ 何て読むのよ？」

「……小麦粉」

……うん。メモに小学生レベルの漢字ドリルも書き足しとひが。

「いってきまーす！」

「はいはい……。いってらっしゃい」

色々と不安なことから本当に行く気かと疑いたくなつたが、あれだけ明るい笑顔で『いつてきまーす』なんて言われたら気持ち良く見送るしかない。決して面倒だからなんて理由ではない。断じて。「さて、今度こそ寝よう。少しくらい寝ないと体が保たないや」彼女を玄関から見送つた後、まっすぐに自室のベッドへと向かつた。

待ち望んだ一日半ぶじくらいの睡眠に向けて、体をベッドへと倒れ込むような勢いで思いつきり沈める。愛用のベッドが生々しく軋んだような音を立てたが気にしない。

だんだんとカーテン越しの日差しによる心地よい暖かさに包まれ、眠気は失われることはなかつた。

そして、込み上げてくるそれに身を任せながら、僕はそのまま意識を手放した。

それから、何だか、その間だけは懐かしい夢に浸つっていたような気がする。

悲しい、哀しい、彼女と、アリスト出会つた頃の夢を。

それから、目が覚めたのはとつぱりと日の暮れた夕方だった。

寝たままカーーテンを開けて、世界が90°回転した夕日をただ何となく眺めてみる。特に何か感情が沸いたわけではなかつたが、何となくスッキリしたような気もする。

体を起こした時に、寝ている間に目頭に溜まつてた涙が暁色に染まりながら腕に抱いていた抱き枕を濡らした。

……抱き枕？

そんなものあつたつけ……？

何となく抱いていたそれを眺めてみると、

「すう……」

「……アリス……？」

抱き枕だと思っていたそれからは返事はない。どうやら本当に寝ているらしい。とにかく起こさないよう気につかいながら、ゆっくりとベッドに寝かせる。

彼女はまるで死人のように静かに、まるで出来の良過ぎてしまった人形のように動かない。こうして見ると、本当に生きているのか、本当に人間なのかと不安さえ覚えてします。

しかし、規則正しく上下するの凹凸の少ない胸と呼吸音が、彼女が紛れもなく生きた人間だと証明する。

「こんな無防備に寝ていると、いつか僕が襲うかもよ……？」

こんなふざけた冗談にも応えはない。

彼女の顔が若干赤く染まつている気がしたが、たぶんそれは夕焼けのせいだろうか。

彼女に毛布をかけて、部屋をあとにする。数時間の睡眠から目覚めた脳がだんだんと覚醒を始めて、体に長時間寝ていた証明とも言える氣急さを伝える。それを感じながらキッチンへと向かう。

何だか喉が渴く。柄にもなく寝ながら涙なんか流したためだろうか。冷えた廊下とスリッパが擦れる乾いた音を聞きながらそう思った。

でも、それは数時間ぶりのキッチンを見た瞬間にそれら全てを忘

れた。

「……何があつたんだろう……。つて、何をやつたんだ、アリスは……？」

まあ、原因是彼女で十中八九間違いないだろう。というか、彼女以外にこんな所業ができるようなやつがいるのならば、今すぐにもそいつは名乗り出るべきだ。食材と食器のペインティングができるクラッシャーとして独特の感性を持つた芸術を見出だしているに違いない。

だつて、今の田の前に広がる光景は、割れた食器に煙を上げるオーブン（本日一回目）、無惨に碎かれて飛び散った食材、乱雑に広げられた複数の料理本等々……。

まったく、どうやつたらかが数時間の間にこうなるのか本当に教えてほしい。実演はしてほしくないなけれど。

現場検証を始めるあくまで一般人みたいな複雑な心持ちでキッシュに踏み込んで、漂う異臭と異形の数々に思わず顔をしかめた。とりあえず彼女が起きたら一発とは言わず殴つておひつ。コーラスクリューかガゼルパンチで。

とにかく目に入るのは地獄絵図を生じG合成したようなこの光景。もう普段から綺麗好きな俺が掃除するのも億劫になるくらい。

「本当にやつかいなのを預かったもんだ……」

そんなつまらない愚痴を聞いてくれるやつは、もういない。

冷蔵庫を開けると、乱雑に詰め込まれたと思われる食材とペットボトルと悪戯混じりにメモに書いた塩と砂糖合わせて2kgの袋が落下してきた。

どうやら彼女はこんな地獄絵図の生じG合成なんて醜悪なものを作成しながらちゃんと頼んだものは買ってきてくれたらしい。無理矢理に詰め込み過ぎてるせいで卵は割れてるし、牛乳はドバドバ流れ出ているけど。まあ、彼女にしては上出来だと自身に言い聞かせながら溶けたアイスクリームを指ですくつて少し舐めてみる。ストロベリーの冷たい甘酸っぱさが渴いた喉を少しだけ潤した。

潰れて所々から牛乳が流れ出る牛乳パックを冷蔵庫から取り出し、お気に入りのマグカップへと注ぐ。注がれた牛乳はカップの半分も満たさなかつたが、見事なまでに床と手と長袖を白く染めてくれた。キッキンペーパーでそれらの染みと溶けたアイスクリームや割れた卵、乱雑に投げ出された調味料の数々を拭き取る。若干さつきよりマシにはなつたが、やはりこの酷い様だけは変わらなかつた。

それからその荒れ果てたキッキンから逃げるよにリビングのソファへと身を沈める。

別に逃げたわけではなく、あの光景から目を逸らしたかつただけだ。というか、忘れさせてくれ。

牛乳の入ったカップを持ったままでは横になれないのテーブルにカップを置く。

「……ん？」

そして、今さらながら気が付いた。

テーブルの上、今置いたマグカップの隣りには、焼け焦げた円柱状のスポンジケーキにまだ空気を含み足りないドロドロの生クリームを塗りたくられたそれ。

「へえ。上手くできたんだ……」

それはたぶん、彼女が作ったケーキだろうか。

作つて満足してここに置いといたのだろうか、なんて思いながらそれを見る。そして、それを見て、やつと思い出した。

「ああ。今日だつたか……」

数個の赤いイチゴと20本の火の氣の無い色鮮やかなロウソクが黒に近い茶色をまだらに染めた白を彩る。

そして、申し訳程度に下手くそなくせに頑張つたのであるう、手作り感溢れる形のいびつな黒いチョコレートのメッセージプレート。

「今日は僕の誕生日か……」

白いチョコレートでメッセージプレートに書かれたその言葉。

残念ながら、この歪んだチョコレートに歪んだ文字では名前までは書ききれなかつたらしい。でも何だかそれが妙に微笑ましくて、とても不器用な彼女らしくて、

「今日は僕の誕生日、か」

もう一度。ただ何となく呟いた。
やつぱり応えてくれる人はいなかつた。

「 いただきます」

そのケーキは、やつぱり不味いくせに、優しい味がした。
彼女がやる気だったのはこのためか、と思つたら何だかおかしくて一人で笑つてしまつた。

「美味しい」

イチゴが。ケーキの味については.....妙に優しい味がした。
それから一口、また一口と、ゆっくりと味わいつゝに食べた。

「」

気が付けば、ただ何となく、彼女が口ずさんでいたあの曲を歌つていて。

「」

わかつたことが一つ。

それは、どうでもいいくらいに、今日の機嫌が良いのは彼女だけではないらしいといつこと。

Fin.

(後書き)

某所にて書いたものを直して書いてみました。
ぶつちやけ、何これってゆー……

これの続きはリクエストか何かありましたら書いてみよいかと思
います。

最後に、読んで下りてごめしてありがとうございましたとハイヤーでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6870e/>

睡眠不足とバースデーケーキ

2010年10月8日15時07分発行